

## Fellowship program に参加して



研修医 2年 山田祥子

今回私は **Fellowship program** として 2008 年 1 月の 1 ヶ月間、ドイツフライブルグ大学病院で麻酔科研修をさせていただきました。

フライブルグは街自体が大学、大学病院の施設で構成されており、各科施設が散らばって存在します。私の研修先の麻酔科はスタッフが 100 名おり、各科麻酔チームに分かれており、各科の施設にある手術室に出張で麻酔をかけに行く、また中央手術部で麻酔をかけるという風になっています。中央手術部は ICU や救急搬送受け入れ施設と同じ建物にあり、ドクターヘリも着陸することができます。

救急部はなく、救急搬送患者は麻酔科、ICU 担当医（主に麻酔科医）が診る事になっていました。

フライブルグに到着し、研修先へ挨拶に行った初日は頭から血の気が引くような、目の前が真っ暗になるような感覚に陥るほど、雰囲気圧倒され、その日は「どうしよう、ヤバイ」という言葉が頭の中にクルクル回って、私はなんて無謀なことに応募したんだ。。。と後悔しました。

いざ、研修が始まると、ドイツ語のカンファレンス、ディスカッション、患者との会話。。。半泣きの日々でした。当然私はゲストでも、学生でもないの、あちらには私をおもてなしする必要も、教育する義務もありません。なので、全く知らない施設で、全く知らないスタッフの中に、自分から声をかけて入っていき、自己紹介をして、馴染んでいくというのは、私にとっては本当に勇気の要ることでした。

3 日目頃まではへこむ一方でしたが、一ヶ月間しかない研修を「早く時間よ過ぎろっ！」と耳と目を塞いで過ごすことはしたくないと思い、勇気を振り絞って、研修医という立場を利用していっぱい恥をかくことにしました。

毎朝、えいっ！と手術室に入り、「私は日本から来た研修医です。今日はここで研修をさせて下さい！」というお願いから始まりました。ドイツ人は日本人と似ていて、恥ずかしがり屋で、人見知りです。気を遣うことも似ていて、話

す前はよそよそしく、向こうから声をかけて来ることはありませんが、勇気を振り絞り話したあとは笑顔になり、堅い握手をかわし、その後はスムーズに打ち解けることができました。

向こうはドイツ語と英語、こちらは英語と身振り手振りでのコミュニケーションはお互い、率直でストレートな伝え方しかできないというところで、仲良くなるのにとっても都合が良かったと思います。麻酔中にはお互い語学を教えあったりもしました。

日々その繰り返しで少しずつ、自分を知ってもらい、1つ1つ研修内容充実化、友達作りを進めていきました。

そんな毎日が必死な1ヶ月間でしたが、終わる頃には仲良しのコメディカルスタッフや先輩ドクターに恵まれ、半泣きになりながらも本当に来てよかったなと思えました。

研修医やこれから研修の始まる方々には今、海外研修に行けるチャンスを得たならぜひ行ってみたいと思います。研修医の今なら、いくら恥をかいてもすぐに笑い話になり、その経験で何か自分が得られるものがあります。フライブルグでの研修がどんなによかったか、もっと居たかった！それしか私にはうまく言葉で伝えられません。勢いで一步踏み出して、ぜひ実際に感じてきてください。

最後に。。。「自分が **Happy** でないと人を **Happy** にはできない」向こうのスタッフに何度も言われた言葉です。病院側もスタッフも皆がそれを意識し、助け合い、カバーし合い、楽しみながら笑顔で仕事をしていました。川崎もそんな環境になったらいいなと思います。